といふ自信あるが爲に、つひ之に乘せられて天位を覬覦するの念を起し、其の自信の厚き、唯一の擁護者とます稱德天皇崩御の後にも、なほ其の僥倖を夢想して、何等自衛の策を講ずる事もせず、何等運動がましき擧にも出でず、天皇の陵下に廬を結んで念佛三昧に耽つて居ることが出來たのであつた。

道鏡の周圍を取卷ける史上幾多の疑團は、多くの系圖の示すが如く彼が皇胤であるといふことによつて始めて解釋し得るのである。我が萬世一系の皇統天壤無窮の皇運は、開闢以來如何なる場合に於ても動搖したゝめしはないのである。道鏡が假りにも皇嗣たるべく提議せられ、彼自身亦それによつて天子たるべき野心を起すに至つたといふのも、畢竟彼が皇胤であつたが爲に外ならぬ。道鏡の凶惡を憎むのあまり、史實の如何を省みずして其の皇胤たることを聞くを快しとせぬものは、爲に皇位の尊嚴を冒瀆する所以を知らざるものと謂はねばならぬ。

（參照）習宜阿曾麿―『中央史壇』五月號（國史上疑問の人物）

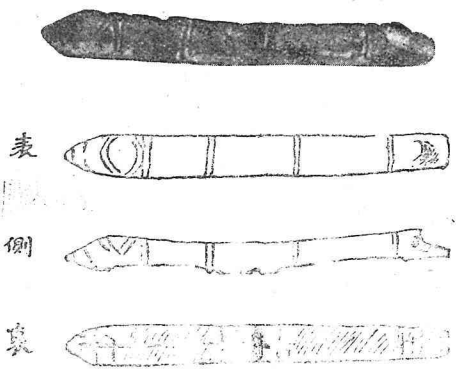
金蠶考

文學博士　濱田耕作

上

近頃我が京都帝國大學文學部の陳列館の藏に歸した小さい蟲形の銅製品が一つある。長さ一寸六分五厘、幅一分七厘、厚一分五厘前後、鍍金が隨處に殘つてゐて、其の他の部分は暗褐色の銅鏽を

呈してゐる。表面には五箇の環節を現はし、四ケ處に二線並行の切目を作つてある。裏面には一端に二對の小さい脚と、稍々離れて體の中央部に近く四對の脚とが截目を以て示されてゐる。其の製作は至つて簡單であつて、一箇の細長い棒狀のものに過ぎ無いけれども、此の形態によつて我々は直ちに蠶（Bombyx mori）の幼蟲を現はしたものであることが分かる。固より其の環節の數が實物の半ばしか無く、脚の數や位置も稍々曖昧であるけれども、爾雅翼に所謂「啄咮々類馬」といふ頭部の恰好など如何にも面白く出來てゐる。我々は此の小さい單純な作品から製作の年代や何かを樣式上推測することは困難であるけれども、其の銅色、鍍金の色合又た製作の眞摯な點などからして、之を他の漢六朝時代の銅製品と比較して、少くとも此等の時代を下がるものの無いことを信ずるのである。



私は此の小さい鍍金の蠶形を手にして、忽ち思出したのは、彼の秦始皇帝の驪山陵中の副葬品中に金蠶あるものが存在してゐたことである。此の陵は陝西省臨潼縣の東西によつて、史記に

「始皇初卽位、穿治驪山、及併天下、天下徒送詣七十餘萬人、穿三泉、下銅而致槨、宮觀百官、奇器珍怪、徙藏滿之、令匠作機弩矢有所穿、近者輒射之、以水銀爲百川、江河大海、機相灌輸、上具天文下具地理、以人魚膏爲燭、度不滅者久之、二世曰、先帝後宮、非有子者出焉、不宜皆令從死、死者

甚衆、葬既已下、或言工匠、爲機藏皆知之、藏重卽泄大事、畢已藏閉中、羨下外羨門、盡閉、工匠藏者無復出者、樹草木以象山」史記卷六始皇本紀

とあるもの是で、其の誇張的の記事中にどれ迄が事實であるか分らないが、其の驚く可き墳墓の構造は、埃及のケオップスの金字塔（ピラミット）にも次ぐ大仕掛のものであつたことは、始皇帝の人物からしても之を推測するに難くは無い。

史記の本文には副葬品に關する詳しい記事は見えないが、陵土未だ乾かざるに、「項羽關に入り之を發き、三十萬人を以てし、三十日を運べども窮むること能はず」水經注卷十九と云はれて副葬品中に、他の珍寶と共に金蠶或は銀蠶なるものがあつたことが一二の書に見えてゐる。卽ち

「始皇陵、以明珠爲日月、魚膏爲燭脂、金銀爲鳧雁、金蠶三十箔、四門施徼」三輔故事

「祥國志曰、始皇陵有銀蠶金雁、以多奇物、故俗云秦王地市、」宋敏求長安志（以上二書陝西通志所引に據る）

と、金銀の差はあるのみならず、此の書の傳ふる所がどれ丈け信用す可きものであるかは問題であるが、兎に角古くから其の內に金蠶若しくは銀蠶なるものがあつたことを傳へられてゐることが分かる。

然るに金蠶なるものが墳墓に副葬せられたことは、單に始皇の陵のみではない。他にも多くの例證を發見することが出來る。卽ち吳王闔閭の夫人の墓には「金蠶玉燕各千餘雙」述異記上があつたことを記し、齊桓公の墓を永嘉の末發掘して、「金蠶數千箔」郡中記を得たとあり、又た安徽省姑孰に於いて、桓溫の女の塚を發いた時、「金蠶銀甕等」南史卷四十三齊宣都王傳が出たとあり、又た漢の劉王の墓は、廣州府番禺城の東にあるのを、明の崇禎九年發掘したのに

「有金人如翁仲之屬者、凡數收、舉之各重十五六

斤、其正處二金像、冕而坐、若王者、與后之儀各五六十斤、地皆金蠶珠貝築之、有鏡一、自發光、燭照暗中、如日月、寶硯一、硯中池有玉魚能遊動、其他異物尙多、不可指識」廣東通志卷二百二十六

とあるのは、何れも名の分かつた人の墳墓と傳へられてゐるものに屬するが、此の外不明の塚墓の例としては、江蘇省下邳の一墓からは、「有一棺尙全、有金蠶銅人、以百數」南史卷十六王元謨傳と見え、四川省益州に於いては、一古墳の石槨中から、

「銅器十餘種、並古形、玉璧三枚、珍寶甚多、不可皆識、金銀爲蠶蛇形者、皆數斗」南史卷四十三齊始興簡王傳

とある、周末から漢代の墳墓と想像せられるものから、金銀の蠶形が發見せられたことが、頻々として報道せられてある。而して此の金蠶發見のことは、餘程人々の注意を惹いた事實と見えて、六朝時代の詩の中にも、例へば梁の何遜の「塘邊見古塚」と題する詩に

「行路一孤墳、路成墳已毀、空疑年歲積、不知陵谷徙、幾經秋葉黃、驟見春流靡、金蠶不可織、玉樹何曾蕊、陌上驅馳人、笑歌自侈靡、今日非明日、所念誰憐此」古詩選卷十六

と、金蠶と玉樹とを對して、感慨を述べてゐるのを見ても、推察するに足ると思ふ。私は此の文獻に見はれてゐる金蠶なるものが、卽ち、今度親しく我々の手にした鍍金の蠶形を謂ふに外ならないと信ずるのである。

下

以上の記事によつて、我々は金蠶或は銀蠶なるものが、少くとも周末から漢代の墳墓の副葬品中の一つであつたことを推測して差支へ無く、一墓に數十箇箇は養蠶の籠を云ふとが、數斗とか云ふ多數をも藏したものらしく思はれる。而して今ま鍍金銅製の蠶形の一遺品の存在から見て、是は元來銅製でそ

れに金銀を鍍金したものを指したのであらうと、想像するに充分である。此の金蠶を副葬することは何時頃から起つて、何時頃まで繼續した風習であるかは明かで無いが、周末秦初から存在して居つたことは、如上の齊桓公や秦始皇の墓陵から想像出來き、六朝頃の人々の書いたものに、之を珍異なるものとして居る處から考へて、其の頃已に行はれて居ない習俗で、漢代頃までゞ絶えてしまつたことかとも想像せられるのである。梁の元帝の終制（金樓子 卷二）に「然擴中石屏風、木人、車馬、塗車芻靈之物、一切勿爲、金蠶無吐絲之實、瓦雞乏司晨之用」とあるのは、必しも當時の習俗を云つたもので無く、寧ろ考古學上の事實を文章に用ひたに過ぎないと見られやう。

扨て蠶形の模造品を墳墓の副葬品に見ることは如何なる理由に本づくであらう乎。漢六朝以前の副葬品中に、我々は燕雁鳧雞等の鳥形、馬牛羊豕駝狗等の獸形、蟾蜍龜魚等の動物を見るのであるが、此等のうち或者は家畜として、或は愛玩動物としての意義から、或は辟邪厭勝的の目的から作られたものであらう。併し蠶の仔虫の形態其者に何等の美觀は無い。たゞ絹糸の產出者として、其の聯想から之を尊重せられるのに過ぎない。併し此の絹の產出と云ふことは、實に支那に取つて非常に重大なる事柄であつて、特に周代以降秦漢の際に於いて、此の養蠶產絹が非常に盛んとなり、日本にも恐らくは秦漢の際朝鮮を經て傳つたものと思はれる。（應神天皇の朝秦氏及び支那人融通王なるもの秦民を率ゐて來朝し養蠶を行ふとある）周代に於いては、天子諸侯皆な必ず養蠶室を有し后妃妻妾親ら之に携はり、其の以後に至つてなほ其の風を傳へて居る。漢代には司蠶の神として苑窺婦人寓氏公主二神を祭つることが見える。斯の如く朝庭及び貴族が特に親しみを有して居た養蠶

支那の特産である産絹の事實は、當代に於いて副葬品として蠶形のものが製作せられ、黄泉の世界に於ける養蠶の象徴として用ゐられ、或は數十箱數斗の多さを埋藏せられたことを了解せしむるに足るのである。

支那は全世界に於ける養蠶の先驅者であり、黄帝の元妃西陵の螺祖なるもの始めて民に之を教へたと云ふ古い傳説以來、支那の特産品となり、支那の國名として希臘羅馬に行はれた「セーレス」「セリカ」の如きも支那の絹「セール」の名から起つてゐること、又た紀元前後から支那の絹が希臘羅馬諸地方に盛に輸出せられ、遂に近代歐洲語の絹の語にまで殘つてゐることは、世間周知のことである。而して是は一方に於いては東西交通の發達他方に於いては支那周秦以來産絹の大發展を暗示してゐることに外ならない。而かも之と並行して周末から秦漢の陵墓に蠶形の副葬せられた習俗を見ることは頗る興味ある現象では無いか。私は此の支那文化史上の一大事實を物語る此の小さい金蠶を、我が大學の標本室に見出すに至つたことを大に喜ばざるを得ない。（六、十二）